

情報リテラシー教育をめぐる新しい課題

のすえ としひこ

野末 俊比古（青山学院大学教育人間科学部准教授）

講演要旨

大学における情報リテラシー教育および図書館が果たす役割の必要性・重要性に対する認識は、ここ数年で確実に拡大・定着しており、図書館が関わる実践は幅広く展開され、一定の成果をあげると至っている。しかしながら、まさに今回の研究会がテーマに掲げている「大学図書館における利用者支援の拡大と深化」をさらに進展させていくためには、情報リテラシー教育をめぐる、これまでの経過・結果を確認・整理し、課題を明確にしたうえで、今後の方向性を検討していく時期にあると思われる。この作業は、実践上のみならず、実践を支える存在としての研究上も求められているものである。

本講演では、情報リテラシー教育をめぐる、講演者が注目すべきであると考えている課題をいくつか指摘し、可能な範囲で分析を加えてみたい。ここでいう課題としては、一方では、指導プログラムの立案・実施・評価（マネジメント）をめぐる事柄、すなわち、

- ・ 指導計画・体系表などの策定（いわゆるらせん型指導など）
- ・ 利用者（学習者）のニーズやスタイルなどの把握・分析
- ・ プレゼンテーション（話法など）や教材作成
- ・ 指導者同士の連携（特に図書館員と教員との連携）
- ・ 指導のプロセスや結果の評価

などに関する方法や手順などに関する事柄が挙げられることになるが、一方では、例えば、

- ・ 図書館が情報リテラシー教育に関わるとはどういうことか？ 例えば、図書館「について」指導することと、図書館（員）「が」（あるいは図書館「で」）指導することとは、どのような関係にあるのか？
- ・ 情報リテラシー教育で指導される（べき）内容は何か？ 知識・技能だけなのか？ そもそもどうやって決められる（べき）なのか？
- ・ 情報リテラシー教育の本来のねらいは何か？ 図書館として「指導」以外にできること（すべきこと）は何か？

などと表現されるような、いわば図書館の使命を改めて問うことにつながる「古くて新しい」問題が含まれることになる。

（本稿作成：2009/07/31）

2009 年度私立大学図書館協会西地区部会研究会（2009/09/18・京都産業大学）研究発表（1）

富山国際大学図書館：2 学部 1 短大-2 キャンパスでの利用者支援

報告者 富山国際大学 子ども育成学部 教授 水田聖一

富山国際学園の概要

- 富山国際大学(1990 年設立。当初「人文学部」一学部二学科でスタート)
現代社会学部(2008 年改組、東黒牧 C)
子ども育成学部(2009 年新設、呉羽 C)
- 富山短期大学(1963 年、呉羽 C)
幼児教育学科、経営情報学科、福祉学科、食物栄養学科、食物栄養学専攻科
- 富山国際大学附属高等学校(呉羽 C)
- 富山短期大学附属みどり野幼稚園(呉羽 C)

2009 年度からの体制

- 東黒牧キャンパス
富山国際大学・現代社会学部(観光専攻・環境デザイン専攻・経営情報専攻)学生
→富山国際大学図書館(人文系、観光・情報系図書中心)
- 呉羽キャンパス
富山国際大学・子ども育成学部学生、富山短期大学・4 学科 1 専攻学生
→富山短期大学図書館

2009 年よりの図書館システム

- 2009 年 1 月新図書館システム(富士通 iLiswave)の導入
共通の図書館システム(OPAC)
VPN インターネット接続による 2 館同時蔵書検索
サーバー 短大 toyama-c.ac.jp 大学 tuins.ac.jp

流通の問題

教員(東黒牧 C、呉羽 C とも)→インターネットを経由して大学図書館に発注(研究図書、学生用図書)
東黒牧 C 教員→大学図書館(東黒牧 C)
大学図書館(東黒牧 C)→宅急便にて短大図書館(呉派 C)→呉羽 C 教員

富山県内図書館横断検索システム

- 富山県立図書館
- 富山大学図書館(五福・杉谷・高岡キャンパス)
- 富山県立大学図書館
- 富山国際大学(東黒牧 C)
- 富山短期大学(呉羽 C)
- 高岡法科大学
- 富山工業高専、富山商船高専図書館
- 富山市立図書館(中央、各地域) 高岡市等、各市町村立図書館

今後の課題

インターネット(有料・無料のデータベース)と紙媒体との共存、相乗効果をどのように作り出していくか。インターネット環境と読書。検索能力・思索力の育成。

「学生サポーターによる選書：武庫川女子大学附属図書館の試み」

武庫川女子大学附属図書館 川崎安子

関本直子

（同） 薬学分館 安波敬子

2002 年の学校教育法の改正に伴い、日本におけるすべての大学は、文部科学大臣の認証を得た評価機関による評価を受けることが義務付けられた。本学では 2008 年度に申請を行い、評価機関のひとつである大学基準協会から、「大学基準に適合している」との認定を受けた。そして、この協会が設定した 15 項目の「大学基準」のうち、図書館に関わる「図書・電子媒体等」において、本学の図書の選定方法が「図書館員・学生・教員の三者の観点から適切に行われている」との評価を得た。

本来、大学図書館の選書は、各大学の立学の精神と教育目標に即した収集方針に照らし、教育と研究をサポートする蔵書構築を目指す必要がある。また、学士力養成の基本段階として、学術書の読み方やレポート・論文作成の技法など、現在の大学図書館には学生の学びを支援する役割が強く求められている。昨今では、学生の多様なニーズに応えるため、図書館に備え付けてほしい本を学生が直接本屋へ赴いて選ぶ「選書ツアー」を実施する大学も増えている。

本学では、図書館員による選書、教員による指定図書・推薦図書制度を中心に、学生のニーズについては「購入希望図書制度」を継続して実施してきたが、その利用率は非常に少なく停滞していた。そこで採り入れたのが、大手書店が大学図書館向けに新刊学術図書を見計らいとして配本するサービスを活用した、学生が主体となって行う選書活動である。多くの学術書と接する機会を定期的に得ることから知的好奇心が喚起され、参加学生からは非常に好評を得ている。

今回の研究発表では、実施から 3 年目を迎えた学生サポーターによる選書活動について、導入の背景から実施に至るまでの経緯、実施による効果と問題点、そして今後の展開、の 3 点を中心に報告する。

Be Student-oriented な図書館報の試み

広島経済大学図書館 辻 水 衣

広島経済大学は典型的な教育大学であり、その教育理念を実現するための行動指針として“Be Student oriented”が提唱されている。これは「すべては学生のために」という意味であり、本学におけるすべての施策決定に当たって「学生の為になるかどうか」という視点が求められている。近年、図書館の利用者である学生の価値観の多様化は顕著で、本学図書館の利用動向も減少の傾向にある。その要因は様々であるが、大学全入時代を迎え、学生の学力の低下や勉学に対するモチベーションの低下がその主な要因と考えられる。

本学では、“図書館と利用者の懸け橋に”というコンセプトで創刊された図書館報「山の上」を1991年以来、年2回刊行してきた。この館報はそれなりに利用者と図書館をつなぐ役割を果たしてきたが、既存の図書館利用者または対外的な目を意識した作りのものであり、最近の学生にはあまり読まれていないように思えた。これまでの館報を見直し、新しい館報づくりを模索して刊行したのが「JavaLa」である。

本発表では、“図書館に來ない学生”を図書館へ向かわせるための一つの試みとして創刊された本学図書館報「JavaLa」を紹介する。「JavaLa」は“図書館に來ない学生”をメインターゲットとしており、学生が苦手意識を感じている活字情報を可能な限り凝縮し、その代わりに写真やイラストによる視覚情報を多用することで、学生が抵抗なく手に取れる図書館報を目指している。2008年12月に創刊されたばかりではあるが、潜在的な利用者である“図書館に來ない学生”を図書館へ導くことで、さらなる利用者支援が行えるものと考えている。

図書館利用活性化への取り組み ～九州共立大学附属図書館における取り組み

九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館
(元 九州共立大学附属図書館)
矢崎 美香

九州共立大学附属図書館では、私立大学図書館協会西地区部会九州地区協議会 2007 年度九州地区研究会（平成 19 年 8 月 24 日（金））において「利用者促進事業－図書館の取り組み」と題し、発表を行った。その際は、図書館職員の減少に伴う図書館サービスの低下を打破するために新たな取り組みおよび継続的な取り組みを再度見直すとともに現状改善目標をたて、利用者サービスの向上を行ってきた。

この推進事業を進めていく上で、最初の目標としていた入館者・貸出冊数は、少しずつではあるが、増加傾向にある。しかし、単なる数字をあげることを望むだけではなく図書館をもっと活用してもらいたいと目標の幅が広がり図書館利用活性化へと取り組みをスライドしていった。

また前回の改善方策としてあげていた①学内的取り組み（図書館情報（リテラシー）教育）、②学外的取り組み（地域社会へのサービス）は更に取り組みを充実させていった。併せて取り組みを行うにあたり広報戦略についても新たな活路を見だし様々な手法をこらして展開してきた。

取り組みの効果をより上げるためにも利用者のニーズを掴まないといけないことも今回の活性化を行うにあたり目を向けるところとなった。まず図書館のアルバイト学生の視点や声、レファレンス利用者の要求、教員からの要望、一般利用者の声などあらゆる方面からのニーズをリサーチして分析して取り組みを行った。

実際の取り組みは継続的に①学内的取り組み（図書館情報（リテラシー）教育）、②学外的取り組み（地域社会へのサービス）と 2 通りの観点から行っていった。

まず、①学内的取り組み（図書館情報（リテラシー）教育）は、取り組みを始めた当初に比べ件数および体制に変化が出ており、教員が個別に申込みを行っていたものが現在では学部単位での申込みと変わっていき図書館と学部と連携事業となっている。また②学外的取り組み（地域社会へのサービス）は生涯学習研究センターと連携を行い公開講座の一部を図書館の無料講座として開催したり、Library Fair と題して大学祭の期間一般の方への利用提供および情報検索などの指導を行い地域サービスを行った。

以上のように図書館の取り組みは少しずつではあるが成果を上げており、今後も継続的な取り組みを行っていききたい